

ミュラー＝アルマックの経済様式理論

——社会的市場経済構想の思想的背景——

村上 寿来

1. はじめに

現代は時代の転換期にあり、新たな経済社会体制が模索されている。そして、その際には、今後の方位を見定めながら、目指すべき体制を政策構想を通じて実現していくことが求められる¹⁾。現代において展開されている経済社会体制の中でも、政策構想を明示的に掲げて実践されてきたものに、戦後のドイツで展開された「社会的市場経済」(Soziale Marktwirtschaft) 構想がある。1948年の通貨改革をその起点として、第二次大戦後のドイツ経済秩序として成立したこの構想は、以来60年以上が経過しているものの、依然としてドイツで掲げられつづけている。このようにある一つの構想が長きにわたって命脈を保っている例は極めて稀であろう。

たしかに、「社会的市場経済」概念は長きにわたって広範に受容されてきたが、その下での現実の経済社会体制は、当然ながら原点のままでありつづけたわけではないだろう。とすれば、そもそも歴史の中で表現される多様な形態を「社会的市場経済」という概念で包括すべきであるのか、むしろ、単なる名称の問題であって、実際には有名無実化しているのではないかが問題となるだろう。そうした事情もあり、近年、ドイツでは社会的市場経済を掲げながらも「新しい社会的市場経済」を模索する動きが生じてきている²⁾。その新たな構想を考える上でも、また、構想と現実を比較するにも、そもそも社会的市場経済とは何なのか、その原点に立ち返り、構想の内容と意義を再検討する必要性がある³⁾。

その際、構想の原点としてこの概念を創出したミュラー＝アルマック (Alfred Müller-Armack) の議論に立ち返って検討することが不可欠である。そもそもミュラー＝アルマックは社会的市場経済をどのようなものとして構想したのか。この問題は、上述のような時代状況の中で改めて注目されるが⁴⁾、ただし、ミュラー＝アルマックの構想は、その本質を捉えづらい側面を

-
- 1) そうした展望に立って今後の経済社会体制の方位を議論したものに野尻 (1995) がある。
 - 2) 例えば、ドイツではシンクタンク「新しい社会的市場経済イニシアティブ」(Initiative Neue Sozial Marktwirtschaft) が組織されて、社会的市場経済に関する議論と啓蒙活動を展開している。<http://www.inism.de/>
 - 3) さらに、EUレベルにおいても社会的市場経済が掲げられ始めている。それは明らかにドイツの構想を利用したものであるが、それは同じものなのか、そして国際的な構想としてはどのようなものになり得るのか、が問われなければならないが、その際にも構想の原点に立ち返る必要があることは同じである。
 - 4) ミュラー＝アルマックについては、Haselbach (1991) が批判的論調ながら詳細に取り上げたのを契機

もっている。ミュラー＝アルマックは、経済秩序としての市場経済原則を極めて重視した点で、新自由主義の系譜に位置づけられる⁵⁾。が、彼は他方で、宗教・文化社会学的研究などの広範な研究を展開し、より社会学的な観点からの総合社会政策（Gesellschaftspolitik）の展開を模索したことから、レプケ（W. Röpke）やリュストウ（A. Rüstow）とともに「社会学的新自由主義」として位置づけられる⁶⁾。そうした背景のもとにミュラー＝アルマックは彼独特のいわば「社会的市場経済思想」を展開しているものであり、構想の原点を確認するには、彼の広範な理論的・思想的背景に目を向けなければならない。

そうした広範なミュラー＝アルマックの背景にあって、社会的市場経済構想を理解する上で極めて重要な議論に、彼が展開した「経済様式」（Wirtschaftsstil）理論がある。ミュラー＝アルマックは、1940年に『経済様式の系譜』⁷⁾を出版し、独自の経済様式理論を基礎に経済体制の宗教社会学的分析を試みていた。この経済様式論は第二次大戦前に経済体制論の一つの流れを形成したものであったが、戦後は次第にこのアプローチは衰退していった。ところが、ミュラー＝アルマック自身は、この経済様式概念を、戦後の社会的市場経済構想の展開においても自己の理論的基礎として放棄しておらず、構想の意味を議論する際に繰り返し提示していたのである⁸⁾。しかし、この概念の存在は認識されていても、その意義についてはあまり注目されてこなかったといわざるをえない⁹⁾。というのも、経済様式論は「歴史哲学、政治史、経済史、文化史が結合した……ジントーゼから生まれた」¹⁰⁾のであり、こうした学際的・統合的な理論であるがゆえに、「経済学者にはこの様式思想への接近は容易ではな（く）……それは手っ取り早い追跡の手をのがれる」¹¹⁾という側面があるからであろう。

そこで、本稿では、このミュラー＝アルマックの「経済様式」概念について改めて彼の議論に

に、ここ15年ほどの間に専門的な取り組みが次々に公にされている。代表的なものに、Dietzfelbinger（1998）、Kowitz（1998）がある。また、ミュラー＝アルマックに重点をおきつつ、オイケン、レプケ、リュストウ、エアハルトといったオールド自由主義との関連において社会的市場経済を検討したものとして、Quaas（2000）がある。さらに、2001年には彼の生誕100周年を記念して、Hasse und Quaas（2002）、Ludwig-Ergard-Stiftung（2002）が出版された。我が国では福田（1999）、福田（2009）がミュラー＝アルマックの社会的市場経済構想を取り上げている。

- 5) 新自由主義の系譜については、村上（2005）、村上（2013）を参照。
- 6) 社会学的新自由主義については、その共通の基盤についてかつて検討を加えた。村上（2002）を参照。また、社会学的新自由主義の人間像と秩序像について近年Hotze（2008）が取り組んでいる。
- 7) Vgl. Müller-Armack（1940）。
- 8) 例えば、Müller-Armack（1976, 11）では、この彼の構想にまつわる論文を集めた著書の序文において、社会的市場経済を「経済社会生活の様式形態」（Stilform des Wirtschafts- und Gesellschaftslebens）と位置付けている。
- 9) ただし、ドイツにおいてはDietzfelbinger（1998）、Dietzfelbinger（2009）、Quaas（2009）など、この概念に注目した議論が現れてきている。
- 10) Müller-Armack（1940, 47）。
- 11) Starbatty（1982, 12）。

即して整理することを試みる¹²⁾。そして、それを踏まえて、それが社会的市場経済構想とどのような関わりをもっているのかについて検討を加えたい。

2. ミュラー＝アルマックの経済様式理論

2.1 経済様式論の系譜

ミュラー＝アルマックは、経済様式論を展開するにあたって、その目的を「今日におけるヨーロッパの経済体制の固有のあり方とその起源的条件を認識すること」¹³⁾と設定している。そして、その起源とはとりわけ、「われわれの経済・政治文化の精神的起源」¹⁴⁾である。ミュラー＝アルマックは、このために「経済様式」概念とその理論を定立し、その視点を通じて明らかになる歴史的展開の中で、経済社会の現実に現れる形成体を明らかにすることを目指しているのである。ただし、そのために彼は、従来の社会科学におけるこうした様式問題がどのように現れてきたのかを確認し、それらの系譜の中で自らの概念を位置づけようとする。

ミュラー＝アルマックによれば、このような様式への関心は、16世紀頃までの神学的歴史観の時代には存在しえない。そこには「自由な歴史解釈の余地」¹⁵⁾は無く、「歴史考察の教義化」¹⁶⁾が行われる。それに対して、新しい歴史観を打ち立てようとする歴史主義的な流れ¹⁷⁾が、「われわれの文化形態の歴史的被拘束性の思想を構想し、それによって政治経済制度の様式多様性への入り口を獲得」¹⁸⁾した。こうした歴史主義の流れを受けて、17世紀後半の比較国家学の展開によって、「経済社会制度の歴史的多様性と被規定性」¹⁹⁾を研究する経済様式論の展開が始まったのである²⁰⁾。

こうした展開は「歴史の世俗的側面」²¹⁾への視点をもたらしたが、逆に内的・精神的側面への視点が次第に失われていくことにもつながる。続く啓蒙主義は歴史研究をさらにすすめたが、自

12) ミュラー＝アルマックの経済様式概念については、手塚（1995）が取り上げており、本稿に先行するが、そこでの取り上げ方と評価は多くをHaselbach（1991）に依拠するものであった。本稿では、様式概念と社会的市場経済構想の関連について、Haselbach以後の研究も踏まえつつ、より内在的にミュラー＝アルマックに依拠しながら考察を加える点が、違いである。

13) Müller-Armack (1941, 63).

14) Müller-Armack (1941, 46).

15) Müller-Armack (1940, 48).

16) Müller-Armack (1940, 48).

17) これに関連する重要な流れとして、アンドレーエ (J. V. Andreae)、ケッカーマン (B. Keckermann)、カリクスト (G. Calixt)、コンリング (H. Conling) を挙げている。Vgl. Müller-Armack (1940, 48).

18) Müller-Armack (1940, 48).

19) Müller-Armack (1940, 48).

20) Vgl. Müller-Armack (1940, 48).

21) Müller-Armack (1940, 49).

らの立場の絶対化のなかで「歴史の平準化」(die Einebnung der Geschichte)²²⁾へとすすみ、文化諸形態の内的な結びつき、経済社会制度の内的な区別の視点は後退する。ミュラー＝アルマックによれば、そうした啓蒙主義への反対運動として内的視点を再度取り戻す動きの中心となったのがドイツであった。ヘルダー (J. G. von Herder) の哲学やメーザー (J. Möser) の保守主義思想は、ロマン主義へとつながり、経済様式の歴史的・文化的な内的規定性の視点を取り戻していくことにつながったというのである²³⁾。この流れは一方で、歴史哲学の展開へとつながり、サン・シモン (H. de Saint-Simon)、コント (O. Comte)、ヘーゲル (G. W. F. Hegel) らによる世界史の段階区分の思想へと帰結した²⁴⁾。そして他方で、専門科学として展開し始めた経済学における歴史学派の展開へとつながっていく。

ドイツ歴史学派は、経済史への専門的科学研究を展開していったが、それは「経済発展段階論」(Wirtschaftstufenlehre)の形成へと向かった。リスト (F. List)、ヒルデブランド (B. Hildebrand)、シェーンベルク (G. Schönberg)、シュモラー (G. Schmoller)、ビュッヒャー (K. Bücher) といった経済学者は、それぞれが独自の外的な基準設定の上に経済の一般的な発展段階の理論を形成しようと試みたのである²⁵⁾。ところが、ミュラー＝アルマックによれば、こうした歴史学派の経済発展段階論は、次第に限界を露呈していく。ミュラー＝アルマックは、経済発展段階論の限界として次のような点を指摘する。すなわち、①単一の外的基準のみによって段階を形成する、②歴史的発展法則の存在を前提としている、③進歩過程の前提が、過去の形成体の過小評価をもたらす、④一定の時代に段階を割り当てることで、形態が不明確な時代を過渡期として取り扱わざるをえない、といった点である²⁶⁾。こうした点は、ミュラー＝アルマックによる問題設定、とりわけ、経済様式の内的な起源へと関心を向ける際には、極め不満足な理論として映る。しかしながら他方で、そもそも経済社会現象における諸現象の統一を内的・精神的側面から科学的に解明することが可能なのかという点が問題となる。その点に関連して、ミュラー＝アルマックは「様式問題は、歴史そのものによって設定されるのであって、科学によって設定されるのではない」²⁷⁾という。つまり、科学的限界によって様式を把握するという課題を放棄することはできないのであって、方法的限界を認識した上で、事実に対する解釈の絶えざる修正を行いながら、よりよい理解へとすすむ努力を継続するしか無いとするのである。

科学的専門分化の進展は、ますますこうした視点を後退させることにつながるが、他方で、それは、専門的個別領域の知識の拡大をもたらし、そのことが様式研究に対しては研究基盤を拡大し、また研究素材を豊かにする点で、様式研究進展の前提にもなる。

そうして、20世紀に至ってようやく、経済様式研究は専門分野として確立される。それを成し

22) Müller-Armack (1940, 50).

23) Vgl. Müller-Armack (1940, 50).

24) Vgl. Müller-Armack (1940, 50-51).

25) Vgl. Müller-Armack (1940, 50-51). 経済発展段階論とその方法論的検討については、Haller (1950)を参照。

26) これらの経済発展段階論の問題点については、vgl. Müller-Armack (1940, 54-57).

27) Müller-Armack (1940, 52).

たのが、ミュラー＝アルマックによれば、ヴェーバー（M. Weber）とゾンバルト（W. Sombart）である。ヴェーバーは「理念型」（Idealtypus）概念を提示して、経済社会現象を内的要因から理解する道を開き、資本主義の精神をはじめとした宗教社会学的研究を展開した²⁸⁾。ゾンバルトは、精神・秩序・技術からなる経済体制論を通じて、経済様式を内的要因と外的要因から総合的に考察する手法を展開した²⁹⁾。この内的要因への展開と学際的・総合的な歴史的現象の研究へとすすんだことによって、経済発展段階論の限界を超えて、「経済様式研究は最終的に彫琢された専門分野の段階へと歩み出た」³⁰⁾とミュラー＝アルマックは評価する。ミュラー＝アルマックの経済様式論は、このヴェーバーとゾンバルトの系譜に位置づけられるのであり、彼らの議論の継承と批判的展開によって、独自の理論を構築しようとしたのであった。

2.2 ミュラー＝アルマックの経済様式概念

では、ミュラー＝アルマックは自らの経済様式概念をどのように規定しているのか。彼は、自らの様式概念の設定の際に、芸術史における様式理論を重要な基礎としている³¹⁾。芸術史においては、例えばゴシック、ロココといったように、ある時代に統一的な芸術様式の出現が観察され、その存在が一般に承認されている。ミュラー＝アルマックはそれとのアナロジーとして、「芸術学が芸術作品の様式をさまざまな芸術の表現統一として確認するように、経済学研究も、われわれの経済諸形態が孤立してそれ自体として存在するのではなく、共通の精神的刺激が相応の表現を生み出した形態領域に、歴史の中で統合されているという事実に直面する」³²⁾という。なぜなら、ミュラー＝アルマックによれば、歴史過程そのものが、「生活諸領域の無関連な並立の中で経過するのではなく、われわれが経済様式と名付ける諸形態を結晶化する」³³⁾のであり、そこには「時代から時代へとあらゆる生活領域を一つの新しい共通の意味や別の形態原理の下におく歴史の能力」³⁴⁾が前提されているからである。内的要因によってもたらされる様式の統一は、「事実」として認識されるのであり、認識されるのであれば、それを捉える科学的取り組みが必要とされる。それゆえ、「様式統一を確認するという課題は、歴史そのものによって設定される」³⁵⁾ということ

28) Vgl. Weber (1904).

29) Vgl. Sombart (1925, 14-20). また、ゾンバルトの経済体制論については、Haller (1950, 61-65) (邦訳, 61-65)、小林 (1976, 194-201) も参照。

30) Müller-Armack (1940, 53).

31) この点は、ゾンバルト、そしてもう一人の経済様式論の代表者ベヒテル(H. Bechtel)の議論に続いている。Vgl. Bechtel (1932)。なお、もう一人の経済様式論の代表者シュピートホフ(A. Spiethof)への言及は彼の『系譜』には全く見られない。景気理論家として出発したミュラー＝アルマックは、彼より年長のドイツにおける景気理論の代表者シュピートホフとは以前から接点があり、その証拠に、シュピートホフの記念論集に彼は寄稿している。Vgl. Müller-Armack (1933, 199-204)。

32) Müller-Armack (1940, 47).

33) Müller-Armack (1940, 46).

34) Müller-Armack (1940, 59).

35) Müller-Armack (1940, 46).

になる。

こうした課題設定を基礎に、ミュラー＝アルマックは、自らの様式概念を「ある時代のさまざまな生活領域における表現と態度の明確な統一」³⁶⁾と定義する。すなわち、歴史現象一般に様式概念を設定する³⁷⁾。そして、「経済様式」を「社会的なるものおよび経済的なるものの領域における現象形態が統一的な特徴の表現を示す」³⁸⁾場合に用いるとする。つまり、生活諸領域は歴史においてひとつの統一した現象を示すが、その様式統一を経済・社会的観点からみると、³⁹⁾「経済様式」が確認されるということである。したがって、ミュラー＝アルマックの「経済様式」概念においては、経済を他の生活諸領域との全体性における関連において把握するという基本的立場が示されているといえる。

ただし、ミュラー＝アルマックによれば、この様式統一は、一つの時代に一つの様式が必ず成立するといったものではない。むしろ、一つの時代や一つの国に、多様な様式が存在する「様式の混合」(Mischung von Stilen)³⁹⁾が通常の姿となる。それゆえ、ミュラー＝アルマックは、「経済様式」に加えて、「経済体制」(Wirtschaftssystem)概念をさらに導入し、その区別を次のように説明する。「ある一つの国での様式の具体的混合が考えられるとき、経済体制ということにする。われわれは経済様式概念を、理念型的純粋形態理念(idealtypisch-reinen Formideen)に割り当てが、それはその理念が求めるものを完全に実現した時代や国においてのみ、事実的な経済体制と一致する」⁴⁰⁾。したがって、「経済体制」はある国のある時代を単位とした、実際に歴史上実現された状態を指すが、ただし、「経済様式」と「経済体制」が一致する可能性、つまり、ある時代に、ある国において一つの経済様式が実現する可能性は排除されてはいない。

ここにおいてはヴェーバーとゾンバルトの影響がはっきりと見て取れるが、しかし、それぞれを単純に継承しているわけでもない。ミュラー＝アルマックは理念型を「歴史的諸現象を具体的多様性からその本質へと縮減すること」⁴¹⁾として理解し、それを「あらゆる歴史考察における必然性」⁴²⁾とするが、ただし、ヴェーバーの理念型が結果としてもたらした「観察する研究者の創造物」⁴³⁾という解釈については断固拒否をしている。ミュラー＝アルマックにとって経済様式はあくまで歴史そのものが生み出すものだからである。また、「経済体制」概念の意味もゾンバルトのものとは異なるが、他方また、ミュラー＝アルマックは、ゾンバルトの経済体制論的方法的な継承、すなわち、経済体制の一連のメルクマールを設定した上での体系的な分類を断念する。

36) Müller-Armack (1940, 57).

37) それゆえ、彼は後に「文化様式」(Kulturstil)概念をさらに展開しようとする。これについてはvgl. Müller-Armack (1949).

38) Müller-Armack (1940, 57).

39) Müller-Armack (1940, 57).

40) Müller-Armack (1940, 57-58).

41) Müller-Armack (1940, 58).

42) Müller-Armack (1940, 58).

43) Müller-Armack (1940, 58).

「体系的に整序されうるのは、同じレベルにあるものや論理的に相互に区別できるものだけ」⁴⁴⁾ であるが、「歴史の内的な展開が、現象を持続的に新たなレベルへと移すことによって、時代と時代を比較不可能とする」⁴⁵⁾ からである。

2.3 様式生成要因としての世界観

したがって、経済様式を生成するものは、歴史の内的・精神的な展開であるが、それは、従来「特定の自然的基き事実の付随現象」⁴⁶⁾ として把握されてきた。すなわち、民族精神、民族性、文化精神といった、一定の民族・文化に固有の要因によるものとされてきたのである。これら経済様式の「存在論的解釈」(ontologische Ausdeutung)⁴⁷⁾ をミュラー＝アルマックは否定する。ミュラー＝アルマックによれば「(経済様式は) 持続的に存在する展開の担い手から純粹に論理的に説明されえない」⁴⁸⁾。というのも、「歴史的形態形成を常に既にそこに存在しているものから説明するならば、それからその本来のものが奪い去られてしまう。すなわち、それによって問題が単純化されるのみならず、歴史において真の新たな創造が生じているという事実もが覆い隠されてしまう」⁴⁹⁾ からである。様式生成の存在論的解釈は、ミュラー＝アルマックによれば、「不変な、それ自体は展開に左右されない値をその起源の基礎として投入する」⁵⁰⁾ 点で「静態的な説明」⁵¹⁾ であり、そして「自然科学的手法の末裔」⁵²⁾ である。しかし、歴史的に生成される経済様式は「それ自体、その時代の人間による形成の結果」⁵³⁾ であるがゆえに、経済様式研究においては、そうした静態的な方法をとる「あらゆる誤った自然科学的アナロジーを放棄し、様式生成を歴史プロセスそのものから説明する動態的考察方法 (dynamische Betrachtungsweise)」⁵⁴⁾ が選択されなければならないというのである。その際、ミュラー＝アルマックによれば「何が目指され、かれこれの様式がなぜ成立せざるをえなかったのかは、個々の時代の生きた指導的価値の探究からのみ把握されうる」⁵⁵⁾。つまり、言い換えれば、時代精神や「世界観」(Weltanschauung)⁵⁶⁾ が経済様式の形成要因として決定的な重要性をもっているのであり、そうした内的要因と、そして現実の外的

44) Müller-Armack (1940, 62).

45) Müller-Armack (1940, 62).

46) Müller-Armack (1940, 59).

47) Müller-Armack (1940, 59).

48) Müller-Armack (1940, 59).

49) Müller-Armack (1940, 59-60).

50) Müller-Armack (1940, 60).

51) Müller-Armack (1940, 60).

52) Müller-Armack (1940, 60).

53) Müller-Armack (1940, 60).

54) Müller-Armack (1940, 60). このような動態理論の構築は、歴史研究のみならず、経済研究においてもミュラー＝アルマックが目指したものであり、彼の立場を理解する上で重要な視点である。

55) Müller-Armack (1940, 60-61).

56) Müller-Armack (1940, 46).

諸条件との相克の中で絶えず変化していく動態こそが歴史の実相であり、それに即してはじめて経済的・社会的なるものを真に理解できるとミュラー＝アルマックは考えているのである。

こうした経済様式理論を基礎に、ミュラー＝アルマックは『系譜』において具体的な経済様式研究に取り掛かる。その際、彼の関心の中心は宗教の経済への影響を明らかにすること、とりわけ、ヴェーバーの議論を発展させて、キリスト教諸宗派間の教義の違いと経済体制・経済様式との関連を検討することにあつた⁵⁷⁾。つまり、彼の議論においては、宗教・信仰の決定的影響力が一面的に強調されているのである。ここから、彼の議論は精神一元論として宗教の影響を絶対化しているとして批判されてきた⁵⁸⁾。しかし、ミュラー＝アルマックは「大きな世界観的体系の経済的展開に対する意義」⁵⁹⁾を明らかにするために、意図的に「世界観の力以外の作用可能性を排除している」⁶⁰⁾ことを明言している。したがって、ミュラー＝アルマックは精神一元論を理論化してそれ以外の作用を否定あるいは過小評価しようとしているのではない。むしろ逆に、従来過小評価されてきた精神的・世界観的要因から歴史に光を当てて、事実を説明することに彼の目的はおかれているということである。ディーツフェルビンガーが指摘するように⁶¹⁾、ミュラー＝アルマックの経済様式は「歴史的・解釈学的カテゴリー」(historisch-hermeneutische Kategorie)であり、したがって、多様な解釈の積み重ねの中で理解を深めていくことに貢献すべきものであろうし、ミュラー＝アルマックの目的もそこにあつたと考えられよう。

3. 社会的市場経済と経済様式

3.1 社会的市場経済構想への展開

以上のような経済様式理論をベースにして、ミュラー＝アルマックは戦前・戦中を通して「宗教・文化社会学的研究」に取り組んでいたが、完全にそれだけに取り組んでいたわけではなかった。彼は1939年からミュンスター大学に招聘され、そこで「定住・住宅政策研究所」(Forschungsstelle für Siedlung- und Wohnungswesen)の所長を勤めるとともに、1941年には「一般および繊維市場経済研究所」(Forschungsstelle für Allgemeine- und Textile Marktwirtschaft)を設立し、そこにおいて繊維産業に関するテーマとともに、まさに市場経済一般に関する研究も展開していたのである⁶²⁾。

また、戦時中におけるオイケンとの関係も、戦後のミュラー＝アルマックにとって大き

57) ここではその内容に立ち入ることはできない。Müller-Armack (1940)を参照。また、我が国では鉢野 (1981)、鉢野 (1989)において、ミュラー＝アルマックの宗教社会学的議論が取り扱われている。

58) 例えば、Haselbach (1991)がある。また手塚 (1995)もハーゼルバッハと同じ評価を下している。

59) Müller-Armack (1940, 46).

60) Müller-Armack (1940, 47).

61) Vgl. Dietzfelbinger (1998, 104).

62) こうしたミュラー＝アルマックの当時の経歴については、vgl. Haselbach (1991), Watrin (2000), Dietzfelbinger (1998).

な役割を果たしたと思われる。ミュラー＝アルマックは既に1941年に国民経済学研究会（Arbeitsgemeinschaft Volkswirtschaftslehre）において、彼の経済様式概念についてオイケンと議論している⁶³。オイケン、ミュラー＝アルマックの経済様式の理論に、いわば歴史に沈潜して現実の経済問題解決に向かわない歴史主義の典型を見ていたのである⁶⁴。オイケン、理論と歴史の「大いなる二律背反」（große Antinomie）⁶⁵の克服に向けて、独自に「経済秩序」（Wirtschaftsordnung）概念を展開し、中央指導経済と流通経済からなる形態論を展開していた⁶⁶。この研究会での議論において、ミュラー＝アルマックは、オイケンから、経済様式研究によって「特殊経済的問題を解決しようとしなさい」⁶⁷と批判を受ける。ミュラー＝アルマックは一方で、こうした批判にたいしても自らの経済様式理論の意義を疑った様子はない⁶⁸。が、他方で、経済研究は特殊経済的問題の解決に役立たねばならないというオイケンの批判には首肯する部分があると感ただらうことは想像に難くない。というのも、その後ミュラー＝アルマックは、経済問題を議論する際にオイケンの経済秩序概念を採用していくとともに、彼の社会的市場経済構想において、オイケンの秩序理論および秩序政策論を摂取していくからである⁶⁹。

ミュラー＝アルマックはオイケンの影響もあって、次第に経済問題の解決に向けた議論に積極的に関わっていく。そして1946年『経済管理と市場経済』⁷⁰において、「社会的市場経済」概念を提示するとともに、戦後の経済秩序に関する議論に決定的な影響を及ぼしていく⁷¹。そしてこの社会的市場経済は、1948年の通貨改革・経済改革を断行したエアハルト（L. Earhard）の代名詞となるとともに、1949年にはキリスト教民主同盟の「デュッセルドルフ綱領」（Düsseldorfer Leitsätze）に採用され、連邦選挙の経済政策プログラムになっていく。その間にも、ミュラー＝アルマックは連邦経済省学術諮問委員等を歴任し、戦後復興の経済社会問題への発言によって影響力を増していく。そして、その後、1952年にエアハルトに請われて連邦経済省の政策部（Grundsatzabteilung）の部長に、1958年からは事務次官（Beamte Staatssekretär）に就任し、エ

63) これについては、vgl. Dietzfelbinger (1998, 102-104).

64) オイケンの歴史学派および経済様式への批判については、Eucken (1940, 70-81) を参照。

65) Eucken (1940, 26).

66) Vgl. Eucken (1940, 70-81).

67) Zitiert von Dietzfelbinger (1998, 104).

68) こうした議論の後にも、ミュラー＝アルマックは『系譜』をほとんど内容を変えることなく改訂しており、また、戦後もほぼそのまま再版している。

69) 例えば、戦後の復興問題を議論した最初の文献Müller-Armack (1945)において既に秩序概念が取り入れられている。また、社会的市場経済構想の基礎にオイケンの競争秩序の理論があることを、ミュラー＝アルマックは繰り返し指摘している。例えば、Müller-Armack (1973) を参照。

70) Müller-Armack (1946).

71) 例えば、ヴィルゲロットは、ミュラー＝アルマック批判への反批判において、「当時の読者の誰もが、この著作（『経済管理と市場経済』）を、そのときまで企てられ、占領諸国によって続けられていた経済・社会政策に対して決着をつけるものと解さざるをえなかった」と述べている。Vgl. Willgerodt (1998, 68).

アハルトと共に社会的市場経済を実際に取り仕切る立場へと出て行くことになる⁷²⁾。

3.2 経済様式としての社会的市場経済

ミュラー＝アルマックは自ら実践にかかわる立場におかれながらも、それと平行して、自らの社会的市場経済構想に関する理論と思想を彫琢する作業にも取りかかっている。

彼による最も有名な1956年の『社会科学辞典』における社会的市場経済の定義「市場における自由の原則を社会的平衡 (sozialer Ausgleich) の原則と結合すること」⁷³⁾は、自由と社会的平衡という異なる原則の「新種のジンテーゼ」(neuartige Synthese)⁷⁴⁾を目指すことを宣言している。社会的市場経済における「Soziale」のSが大文字で常に記されるように⁷⁵⁾、二つの原則が等価的な位置づけを付与されるとともに、相容れない両者が相互補完的に統合されることがその原理的特徴なのである。そしてそれは、より具体的には「その目的が競争経済の基盤の上に自由なイニシアティブをまさに市場経済的成果を通じて保証された社会的進歩と結びつけることである、秩序政策理念」⁷⁶⁾として位置づけられている。ここでは、オイケンに由来する概念が用いられているとおり、彼を実際に名指ししながら、競争秩序政策による競争秩序の実現がまずもって社会的市場経済の基盤であることが主張されている。この競争秩序はその経済的貢献能力を通じて社会的課題の解決にも寄与する点で「それ自体に既に内在する社会的機能」⁷⁷⁾を有するが、それだけでは社会的課題を全て解決はできない。それゆえ、さらなる社会的進歩を目指した「市場整合的」(marktkonform)⁷⁸⁾な社会政策が広範に導入されなければならない。このように、社会的市場経済は、市場そのものの社会的機能を強調するのみならず、市場整合的社会政策を通じた社会的課題の解決を目指す体系として、その政策が定義される⁷⁹⁾。

このように、社会的市場経済はまずもって経済秩序構想として位置づけられている。しかし、これに先立つ1952年、彼が連邦経済省に入省する年に公にされた『社会的市場経済の様式と秩序』⁸⁰⁾では、標題から明らかなように、既に「様式」概念を導入して社会的市場経済構想と政策課題が説明されている。ここでミュラー＝アルマックは、社会的市場経済構想のそれまでの大きな成果を確認するが、しかし、「過去の4年にドイツにおいて経済政策上行われたものは、精神的構想としての社会的市場経済と単純には等置することはできない」⁸¹⁾とする。そして、社会的

72) この連邦経済省時代については、vgl. Müller-Armack (1973).

73) Müller-Armack (1956, 243).

74) Müller-Armack (1956, 244).

75) ミュラー＝アルマックは、最晩年に次のように述べている。「社会的市場経済は大文字で書かれる。それが私の最後の願いであります」(Müller-Armack, 1978, 117)。

76) Müller-Armack (1956, 245).

77) Müller-Armack (1956, 245).

78) Müller-Armack (1956, 246).

79) ミュラー＝アルマックの社会的市場経済構想については、村上(2001)を参照。

80) Müller-Armack (1952).

81) Müller-Armack (1952, 232).

市場経済を「そもそも歴史においてまだ実現されていない市場経済的秩序の可能性」⁸²⁾と位置づける。では、それを実現するために何が必要か。ミュラー＝アルマックは具体的な当時の経済問題を指摘すると共に、「経済的秩序の形成が重要なだけでなく、経済的秩序を全体的な生活様式 (Lebensstil)へと編入することが必要である」⁸³⁾とするのである。そしてその根拠として、ミュラー＝アルマックは、まさに彼の経済様式研究の成果をここで指摘する。「芸術史におけるのと同じように、経済社会史も様式形成によって規定され、……歴史的形態は、たいていは、統一的な、特定の様式原理によって支配された形態において、晶出する」⁸⁴⁾。しかるに、未だ社会的市場経済の現実が、そのように様式としての統一がもたらされていないというのである。それゆえ、社会的市場経済を様式化するという「歴史的課題としての様式形成」⁸⁵⁾が重要な課題となる。

なぜ社会的市場経済は様式たりえていないのか。そこには市場経済秩序に対する彼の認識がおかれている。ミュラー＝アルマックは、社会的市場経済構想の旗印のもとで実現されてきた「競争経済は、社会を全体として統合し、共通の態度ならびに信念、つまりはそれなしには社会は存在できないような、価値規範を設定することはでき(ず)……社会的な拘束力の実体を消耗させ、諸個人をしばしば辛いものと感じるような孤独の中へとおく」⁸⁶⁾とみなす。つまり、競争秩序だけでは、社会の統一をむしろ解体する方向へと作用するというのである。他方で、社会的市場経済構想自体も、「旧自由主義ならびに社会主義の意味における世界観ではありえない」⁸⁷⁾という。したがって、社会的市場経済構想自体が、内的要因をもたらし、いわば内在的に様式化することはできないのである。それが実現されるには、現代において精神的な統一を実現するような、価値基盤が形成されなければならない。それは、社会的市場経済構想とは別の次元でもたらされるべきものである。「価値の再生が世俗化された諸力からなされうるのか、あるいは、私が思うに、宗教的なものからのみ獲得されうるのかはここではさらに追求されないが、しかし、いわばここで新しい社会的全体秩序の問題は、この最も広範な領域に至ることは避けられない」⁸⁸⁾。それは、国家によって、あるいは政策的に生み出される性質のものではない。

3.3 社会的宥和による様式統一

では、ミュラー＝アルマックは、どうすべきと考えるのか。この問題についてミュラー＝アルマックは『社会的宥和』(Soziale Irenik)⁸⁹⁾において考察を加えている。ミュラー＝アルマックは、

82) Müller-Armack (1952, 234).

83) Müller-Armack (1952, 237).

84) Müller-Armack (1952, 237).

85) Müller-Armack (1952, 238).

86) Müller-Armack (1952, 235).

87) Müller-Armack (1952, 238).

88) Müller-Armack (1952, 238).

89) Müller-Armack (1950).

現代における世界観の分裂状態を確認し、再び統一をもたらすことは不可能だと判断する⁹⁰⁾。現代は「深層的な精神的解体過程」(tiefe geistige Auflösungsprozeß)⁹¹⁾にあり、「局所的に食い止めることが可能な社会危機に関係しているのではなく、基盤そのものに横たわっている病に関わっている」⁹²⁾というのである。ならば、こうした危機的状況においては、かつての時代のような形での様式統一は不可能ということになる。だが、ミュラー＝アルマックは、そこで現代における新たな統一の可能性を求める。それが「社会的宥和」であり、「分裂の事実を所与として受け取るが、その事実に対して、共通の統一をめぐる努力をあきらめないような、宥和的和解 (irenische Versöhnung)」⁹³⁾という統合の形である。世界観の間の対立は、いわば神々の戦いであり、解決不能である。しかし、ミュラー＝アルマックによれば、「宥和的統合の目標を、社会形成の問題において……具体的に出会う、実践的な世界の課題に関わらせるならば」⁹⁴⁾宥和は可能であるという。つまり、それぞれの世界観的立場が目指す社会像の現実世界における具体的あり方においては、一致する可能性が残されているというのである。

そのような社会形成における課題を迫及する政策を、ミュラー＝アルマックは「総合社会政策」(Gesellschaftspolitik)⁹⁵⁾として位置づける。社会的市場経済が現代において可能な「社会的宥和」を目指し、実現するには、この総合社会政策が不可欠な構成要素となる。社会的市場経済が経済様式たるには「人間を生産者ならびに消費者として機能的に見るだけでなく、人格的存在において見る、総合社会政策によって補完されなければならない」⁹⁶⁾ということになるのである。

ミュラー＝アルマックの経済様式理論と社会的市場経済構想とは、社会的宥和を通じて明確に結びつけられるのであり、そしてそれは具体的には総合社会政策の展開によることが明らかとなる⁹⁷⁾。とすれば、ミュラー＝アルマックが後に「社会的市場経済の第二局面」を主張し、「総合社会政策的指導像」(gesellschaftspolitischer Leitbild)⁹⁸⁾による構想の補完を主張するのは、首尾一貫した態度とみなすことができる⁹⁹⁾。「社会的宥和」は、いわば永遠に求めつづけなければならない

90) ミュラー＝アルマックは、カトリック、プロテスタント、社会主義、自由主義の4つの世界観を挙げている。Vgl. Müller-Armack (1950, 560).

91) Müller-Armack (1950, 576).

92) Müller-Armack (1950, 576).

93) Müller-Armack (1950, 563).

94) Müller-Armack (1950, 563).

95) Müller-Armack (1952, 237).

96) この構想の一貫性については、彼の問題意識の観点からかつて取り上げた。これについては村上(2001)を参照。

97) ミュラー＝アルマックの社会的市場経済構想と社会的宥和の関連性については、Tuchtdfeldt (1982), Koslowski (2000), Quaas (2002)を参照。

98) Vgl. Müller-Armack (1952, 237), Müller-Armack (1960), Müller-Armack (1962).

99) ただし、ミュラー＝アルマックが第二局面において「社会的市場経済の解釈において転換を行う」(Müller-Armack, 1960, 275)と述べているのは、表現の行き過ぎに思われる。構想の解釈は決して変わっておらず、変わったのは追求される課題とその重点のほうである。

い目標であり、さまざまな価値観の間でおおよそその一致が見られる社会像を、総合社会政策を通じて追求していくことに他ならない。また、ミュラー＝アルマックの経済様式理論の観点からいえば、経済様式は内的要因と現実の外的条件との相互作用において動態的歴史過程の中にあるのであり、したがって、総合社会的政策課題も時代によって変遷をたどっていかざるをえない。社会的市場経済構想は、常に時代の総合社会政策的課題を探り、その解決を図ることがその本質であり、それを追求することで様式化されうるのである。

このようにみると、他方で、ミュラー＝アルマックの経済様式概念の機能については転換が生じていることが指摘される。ディーツフェルビンガーによれば、そもそものミュラー＝アルマックの経済様式概念は、「解釈学的カテゴリー」として「構成的機能」(rekonstruktive Funktion)¹⁰⁰⁾を割り当てられたものである。が、その機能は社会的市場経済においては、今度は「予見的機能」(antizipatorische Funktion)¹⁰¹⁾をもつものとなる。すなわち、過去に結晶化した様式を回顧的に再構成して解釈するのではなく、将来に意識的に実現を目指すべきものを予見し、それを「命令」(Imperativ)¹⁰²⁾として掲げるためのものになっているというのである。それゆえ、そのような様式の意識的形成がそもそも可能かが問題となる。ディーツフェルビンガーは、ベヒテルのこれに関連した警告を指摘しつつ¹⁰³⁾、対象を概観可能なだけの距離が無ければ様式を再構成することは困難であることを指摘する¹⁰⁴⁾。

たしかに、ここにおいてミュラー＝アルマックの経済様式のもつ機能は変更されている。しかも、内的要因による統一が不可能で、せいぜい「社会的宥和」しか望みえない現代においては、経済様式の意味そのものも変化しているといえよう。だが、こうした問題点については、次の発言に示唆されているように、ミュラー＝アルマックも十分理解していたと思われる。「今日の社会の状況において、われわれは将来の可能性に関して生成されるものも客観的に解釈するという勇気をもたなければならない。われわれの時代は、この時代の社会的意志と、自由の中で生きるというわれわれの希望との対立を、止揚しないまでも、少なくとも緩和するような、統合的解決の必要に迫られている。われわれの社会の極めて異なった諸集団のなかに、自由主義的な秩序と社会的安定との真の結合が中心の関心であるような人々が存在する。この希望は実現されうることか、そしてどのような形で実現されうることかについて語ることは、われわれの義務である」¹⁰⁵⁾。困難は承知しながらも、根源的な危機に陥った現代においてその困難な課題に勇気をもって向か

100) Dietzfelbinger (1998, 104).

101) Dietzfelbinger (1998, 233), Dietzfelbinger (2009, 108-109).

102) Dietzfelbinger (1998, 234), Dietzfelbinger (2009, 110).

103) 「極めて近い過去における経済様式と生活形態への問いは、われわれが現在に近づけば近づくほどそれだけ大きな困難に突き当たる。このことは、過去に対する距離の短さだけでなく、十分な概観が困難であるということからも生じる。さらにそれは多くの矛盾する解釈の試みによっても増大する。社会学や政治学の論文を一瞥すると示されるように。」 Bechtel (1967, 487).

104) Dietzfelbinger (1998, 234), Dietzfelbinger (2009, 114).

105) Müller-Armack (1952, 233).

うことを、彼は自らに義務づけたのである。

4. むすびにかえて

ディーツフェルビンガーのいう「再構成的機能」としての経済様式も、実際には過去の様式把握において完全な客観性は保証されえず、誤りの可能性が含まれる。それにもかかわらず、事実として様式が確認される限り、その把握を目指すべきだというのがミュラー＝アルマックの経済様式理論であった。経済様式という現象は、諸生活領域の総合的・統合的な現象であり、それゆえに科学的諸領域による学際的・協働的アプローチが要請されるのであり、専門科学的な意味で精密性や客観性は保証されないのである。経済様式論者は、誤りを犯すリスクを背負いながら、事実に向かうしか無い。このように見れば、経済様式理論における概念の機能転換においても、やはりミュラー＝アルマックの態度は一貫していると見ることも可能であろう¹⁰⁶⁾。

本稿では、ミュラー＝アルマックの経済様式理論を整理し、ミュラー＝アルマックの社会的市場経済構想においては、彼の経済様式理論が重要な思想的背景となっていることを確認した。経済様式としての社会的市場経済は、決して単なる経済秩序構想ではありえない。彼が求めた自由の原則と社会的平衡の原則の等価性は、総合社会政策的領域を含んだ全体性を意味する。このような、彼の異なる原理の統一というアプローチから、ヴルフはミュラー＝アルマックを「弁証法的新自由主義」(dialektische Neoliberalismus) 特徴付けた¹⁰⁷⁾。ミュラー＝アルマック自身は、自らの立場を弁証法的であると積極的に主張していたわけではないが、少なくとも彼のさまざまな領域における貢献は、多様な原理の統一を目指す点でたしかに共通している¹⁰⁸⁾。

こうしたミュラー＝アルマックの思想的特徴には、彼の人間観が関わっている。ミュラー＝アルマックは、ケルン大学においてシェラー (M. Scheler) やプレスナー (H. Plesner) と同時代を過ごしており、そこで彼らが創始した「哲学的人間学」(philosophische Anthropologie) を受容し、それを自らの重要な思想基盤においた。さらには、それらを基盤にした独自の「社会科学的人間学」(sozialwissenschaftliche Anthropologie)¹⁰⁹⁾ についても展開を試みている。この彼の人間学的基盤は、経済様式論、さらには社会的市場経済構想においても重要な基礎を提供している¹¹⁰⁾。この面からの検討はミュラー＝アルマックの議論を理解する上で不可欠であろう。今後の

106) またこうしたミュラー＝アルマックの気質は、一時期でもナチスに対して期待してしまった要因のひとつとみることもできよう。ミュラー＝アルマックとナチスの関係については、Haselbach (1991), Diezfelbinger (1998), Watrin (2000) を参照。

107) Vgl. Wulff (1976).

108) ヴンシェは、ミュラー＝アルマックが晩年、ヴルフの博士論文を審査した際、この弁証法的新自由主義という表現に際して当初拒絶的な態度をとったが、最終的にはそれを受け容れ、自らのそうしたアプローチを意識するようになったと述べている。Vgl. Wünsche (1981).

109) Vgl. Müller-Armack (1963).

110) 社会的市場経済の背景に哲学的人間学があることは、ミュラー＝アルマック自身、繰り返し言及し

課題としたい。

付記) 本研究はJSPS 科研費25380250の助成を受けたものです。

参考文献

- Bechtel, Heinrich (1930), *Der Wirtschaftsstil des deutschen Spätmittelalters. Der Ausdruck der Lebensform in Wirtschaft, Gesellschaftsaufbau und Kunst von 1350–1500*, München.
- Bechtel, Heinrich (1967), *Wirtschafts- und Sozialgeschichte Deutschlands: Wirtschaftsstile und Lebensformen von der Vorzeit bis zur Gegenwart*, München.
- Dietzfelbinger, Daniel (1998), *Soziale Marktwirtschaft als Wirtschaftsstil. Alfred Müller-Armacks Lebenswerk*. Gütersloher Verlagshaus.
- Dietzfelbinger, Daniel (2009), Soziale Marktwirtschaft als Imperativ. Alfred Müller-Armacks Stiltheorie, in, Abländer, Mischael S./Ulrich, Peter (Hg.), (2009) *60Jahre Soziale Marktwirtschaft. Illusionen und Reinterpretationen einer ordnungspolitischen Integrationsformel*. Haupt Verlag.
- Eucken, Walter (1940), *Die Grundlagen der Nationalökonomie*. Springer-Vrelag, Berlin, Göttingen und Heidelberg. (大泉行雄訳 (1958) 『国民経済学の基礎』 勁草書房。)
- Haller, Heinz (1950), *Typus und Gesetz in der Nationalökonomie- Versuch zur Klärung einiger Methodenfragen der Wirtschaftswissenschaften*, Kohlhammer, Stuttgart und Köln. (足立正樹監訳, 島本美智男・永合位行訳 (1995) 『経済学における定型と法則—方法論上の諸問題の解決に向けての試み—』 法律文化社。)
- Koslowski, Peter (1998), The Social Market Economy: Social Equilibration of Capitalism and Consideration of the Totality of the Economic Order. Notes on Alfred Müller-Armack, in, *Koslowski, Peter* (Ed.); *The Social Market Economy. Theory and Ethics of the Economic Order*. Berlin.
- Kowitz, Rolf (1998), *Alfred Müller-Armack: Wirtschaftspolitik als Berufung. Zur Entstehungsgeschichte der Sozialen Marktwirtschaft und dem politischen Wirken des Hochschullehrers*. Deutscher Instituts-Verlag.
- Ludwig-Ergard-Stiftung (2002), *Europa als Wertgemeinschaft: Wege und Irrwege. Zum 100. Geburtstag von Alfred Müller-Armack*. SINUS-Verlag, Krefeld.
- Müller-Armack, Alfred (1933), Beitrag, in, Clausing, Gustav (Hg.), *Der Stand und die nächste Zukunft der Konjunkturforschung. Festschrift für Arthur Spiethoff*, München.
- Müller-Armack, Alfred (1940), Genealogie der Wirtschaftsstile: Die geistesgeschichtliche Ursprünge der Staats- und Wirtschaftsformen bis zum Ausgang des 18. Jahrhunderts, in, ders (1981), *Religion und Wirtschaft. Geistesgeschichtliche Hintergründe unserer europäischen Lebensform*, dritte, unveränderte Auflage, Bern und Stuttgart.
- Müller-Armack, Alfred (1946), *Wirtschaftslenkung und Marktwirtschaft*, widerabdruck in, ders (1976), *Wirtschaftsordnung und Wirtschaftspolitik*. Bern und Stuttgart.
- Müller-Armack, Alfred (1947), *Diagnose unserer Gegenwart. Zur Bestimmung unseres geistesgeschichtlichen*

ている。例えば, Müller-Armack (1973, 235) を参照。また, ミュラー＝アルマックの人間観については, Hotze (2008) が詳細な検討を加えている。経済様式論と哲学的人間学との関連については, Dietzfelbinger (1998) が詳細に取り上げている。

- Standorts*. Zweite Aufl, Bern und Stuttgart., 1981
- Müller-Armack, Alfred (1948), Das Jahrhundert ohne Gott. Zur Kulturosoziologie der unsere Zeit, widerabdruck in, ders (1981), *Religion und Wirtschaft*. Bern/Stuttgart.
- Müller-Armack, Alfred (1949), Zur Metaphisik der Kulturstile, widerabdruck in, ders (1981), *Religion und Wirtschaft*. Bern/Stuttgart.
- Müller-Armack, Alfred (1950), Soziale Irenik, in, ders (1981), *Religion und Wirtschaft*. Bern/Stuttgart.
- Müller-Armack, Alfred (1952), Stil und Ordnung der Sozialen Marktwirtschaft. Widerabdruck in, ders (1976), *Wirtschaftsordnung und Wirtschaftspolitik*. Bern und Stuttgart.
- Müller-Armack, Alfred (1956), Soziale Marktwirtschaft. In: *Handwörterbuch der Sozialwissenschaften*. Bd. 9, wiederabgedruck in, ders (1976), *Wirtschaftsordnung und Wirtschaftspolitik*, Bern und Stuttgart.
- Müller-Armack, Alfred (1959), *Religion und Wirtschaft. Geistesgeschichtliche Hintergründe unserer europäischen Lebensform*, dritte, unveränderte Auflage, Bern und Stuttgart, 1981.
- Müller-Armack, Alfred (1960), Die zweite Phase der Sozialen Marktwirtschaft-Ihre Ergänzung durch das Leitbild einer neuen Gesellschaftspolitik. in, ders (1976), *Wirtschaftsordnung und Wirtschaftspolitik*. Bern und Stuttgart.
- Müller-Armack, Alfred (1962), Das gesellschaftspolitische Leitbild der Sozialen Marktwirtschaft, in, ders (1976), *Wirtschaftsordnung und Wirtschaftspolitik*. Bern und Stuttgart.
- Müller-Armack, Alfred (1963), Gedanken zu einer sozialwissenschaftlichen Anthropologie, in, Karenberg, F./ Albart, H. (Hg.): *Sozialwissenschaft und Gesellschaftsgestaltung. Festschrift für Gerhard Weisser*. Berlin.
- Müller-Armack, Alfred (1976), *Wirtschaftsordnung und Wirtschaftspolitik. Studien und Konzepte zur Sozialen Marktwirtschaft und zur Europäischen Integration*, 2. erw. Auflage, Bern und Stuttgart.
- Haselbach, Dieter (1991), *Autoritärer Liberalismus und Soziale Marktwirtschaft - Gesellschaft und Politik im Ordoliberalismus*. Baden-Baden.
- Hasse, Rolf H. und Quaas, Friedrun (Hg.) (2002), *Wirtschaftsordnung und Gesellschaftskonzept. Zur Integrationskraft der Sozialen Marktwirtschaft*. Vrelag Paul Haupt, Bern, Stuttgart und Wien.
- Quaas, Friedrun (2000), *Soziale Marktwirtschaft. Wirklichkeit und Verfremdung eines Konzepts*. Bern/Stuttgart/Wien.
- Quaas, Friedrun (2002), Soziale Irenik. in, Hasse, Rolf/Schneider, Herman/Weigelt, Kraus (Hesg.), *Lexikon Soziale Marktwirtschaft. Wirtschaftspolitik von A bis Z*, Ferdinand Schöningh, Paderborn/München/Wien/Zürich.
- Sombart, Werner (1925), *Die Ordnung des Wirtschaftslebens*, Springer, Berlin.
- Starbatty, Joachim (1982), Alfred Müller-Armacks Beiträge zur Theorie und Politik der Sozialen Marktwirtschaft, in, Ludwig-Erhard-Stiftung (Hg.), *Symposion VIII. Soziale Marktwirtschaft im vierten Jahrzehnt ihrer Bewährung*. Stuttgart.
- Tuchfeldt, Egon (1982), Die philosophischen Grundlagen der Sozialen Marktwirtschaft - Gedanken zur Weiterentwicklung der sozialen Irenik Alfred Müller-Armacks, in, *Zeitschrift für Wirtschaftspolitik*, Jg. 31.
- Watrin, Christian (1998), The Social Market Economy: The main ideas and their influence on economic policy, in; P. Koslowski (Ed.), *The social market economy. Theory and Ethics of the Economic Order*. Berlin und Heidelberg.
- Watrin, Christian (2000), Alfred Müller-Armack - Economic Policy Maker and Sociologist of Religion, in, Koslowski, Peter (Ed.), *The Theory of Capitalism in the German Economic Tradition*, Springer.

- Watrin, Christian (2002), Geistgeschichtliche Grundlagen der Sozialen Marktwirtschaft, in, Ludwig-Ergard-Stiftung (2002), *Europa als Wertgemeinschaft: Wege und Irrwege. Zum 100. Geburtstag von Alfred Müller-Armack*. SINUS-Verlag, Krefeld.
- Weber, Max (1904), Die >Objektivität< sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis, in, Weber, Max, *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, hg. von J. Winkelmann, 7. Auflage, Tübingen, 1988. (富永祐治, 折原浩, 立野保男訳 (1998) 『社会科学と社会政策にかかわる認識の客観性』岩波文庫。)
- Willgerodt, Hans (1998), Die Liberalen und ihr Staat — Gesellschaftspolitik zwischen Laissez-faire und Diktatur, in, *ORDO-Jahrbuch für die Ordnung von Wirtschaft und Gesellschaft*. Bd. 49.
- Wulff, Manfred (1976), *Die neoliberale Wirtschaftsordnung. Versuch einer dynamischen Analyse der Konzeptionen und Realität*. Tübingen.
- Wünsche, Horst Friedrich (1981), Diskussion, in, Ludwig-Erhard-Stiftung (Hg.): *Symposium VIII. Soziale Marktwirtschaft im vierten Jahrzehnt ihrer Bewährung*. Stuttgart.
- 小林大造 (1976) 「ゾムバルトとリッツェル—新社会主義への体制形態論の系譜—」野尻武敏編著『現代の経済体制思想』新評論。
- 手塚真 (1995) 「ミュラー＝アルマックと「社会的市場経済」—ドイツにおける近代知識人の問題—」『帝京国際文化』第8号 pp. 219-240。
- 野尻武敏 (1974) 『経済政策原理』晃洋書房。
- 野尻武敏編著 (1976) 『現代の経済体制思想』新評論。
- 野尻武敏 (1997) 『第三の道—経済社会体制の方位』晃洋書房。
- 鉢野正樹 (1981) 「ミュラーアルマックとリュストウ—宗教と社会の関連において—」『社会哲学』1981 新春号。
- 鉢野正樹 (1989) 『現代ドイツ経済思想の源流』文眞堂。
- 福田敏浩 (1999) 「社会的市場経済の秩序像—オイケンとミュラーアルマック—」『滋賀大学経済学部研究年報』6号, pp. 1-21。
- 福田敏浩 (2009) 「社会的市場経済の人間像と秩序像—アルフレート・ミュラーアルマック説の検討—」『滋賀大学経済学部研究年報』16号, pp. 1-14。
- 村上寿来 (2001) 「ミュラー＝アルマックの社会的市場経済構想—その背後におかれた問題意識について—」『経済社会学会年報』23。
- 村上寿来 (2002) 『社会学的新自由主義の秩序政策構想』神戸大学博士論文。
- 村上寿来 (2005) 「経済政策の思想的背景」丸谷治史・永合位行・高倉博樹・朴勝俊編著『現代経済政策論』中央経済社。
- 村上寿来 (2013) 「経済社会体制と政策思想の諸系譜」足立正樹編著『現代の経済社会と福祉社会の展望』高菅出版。